

健康文化

怖い「蜂窩織炎」

前越 久

本誌第21号に、私がその時までには罹患した病気の総集編のつもりで「病気の問屋」と題して書かせて頂いた。しかし、病気は忘れた頃にやってくるのであろうか、第37号にまた新たな病気に罹った体験談を書くことになってしまった。あまり有り難くない病気の問屋の在庫の話であるが、ご参考になれば幸いである。

8月16日(土)、久しぶりに晴れた暑い土曜日の朝であった。家内と我が家の敷地内の草取りを行った。軍手にGパン、日よけの帽子をかぶり、鎌を手にほんの1時間ほどの作業であったと思う。それでも45リットルの可燃ゴミ用のポリ袋が3つほどになった。都会の真ん中でも、コンクリートやアスファルトが途切れて土が顔を出しているところには、名前は知らないが何種類かの雑草が茂り、特に雨上がりには成長が早いようである。まさに‘雑草の如く’がぴったりの生命力を感じた。心地良い汗をかいたので、シャワーを浴び、8時頃、朝食をとった。この日は、外出することもなく1日を過ごした。

8月17日(日)、午後から、ホームセンターや大型電気店に家内と連れだって買い物に出掛けた。私は外出するときは、必ず万歩計を携行するようにしている。心筋梗塞の治療をしてから、運動不足解消のためできるだけ歩くことに心がけているからである。夏の暑いときは、冷房のきいたデパートやスーパーなど大型店舗内を散策するようにしている。地下鉄を使って都心のデパートに行き、一回りして帰宅すると凡そ7,000~8,000歩になる。なかなか10,000歩にならないのが問題ではある。この日は約6,000歩で、夕方5時頃帰宅した。夜7時、夕食も普通にとったと思う。10時頃からであっただろうか、右鼠径部のリンパ腺が腫れ、押さえると痛みを感じずるようになった。どうもおかしい?丁度そのころ、自宅前に救急車が止まり中年の男性が運ばれて行くのを窓から見ていた。それから2時間後の0時頃であった、何となく体が熱っぽくなり、悪寒がきたので、体温を測ったところ39.4℃にもなっていた。また、右鼠径部の

痛みが急激にひどくなり、歩行が困難になってきたので思案の末、私も救急車のお世話になることにした。“ピーポー、ピーポー”という警報音は鳴らさないで来てほしいと、家内が頼んだらしいが、それは出来ないとのことであった。電話をして10分後くらいで到着した。0時30分頃であった。「どうしました？」と声をかけてきた救急隊員は、2時間ほど前に我が家の前に来た隊員と同じ隊員であるような口振りであった。仕事とはいえ、夜中に2度も迷惑をかけてしまい申し訳ない気持ちであった。

救急病院に到着後、直ちに採血、心電図の検査のほか、胸・腹部単純X線撮影およびX線CTにより胸部から下腹部に至る撮影が行われた。X線写真からは特に異常は見つからなかったようであった。救急医の私への説明では、右足の指間にある水虫からばい菌が入ったのかもしれない。原因ははっきりしないが、ばい菌により鼠径リンパ腺が腫れたのであろうということであった。動脈血中の酸素濃度が低いということで、酸素吸入をしながら、40分ほどかかって、抗生物質の点滴を受けた。明日、血液内科を受診するようにと指示され午前4時ころタクシーで帰宅した。

8月18日(月)、昨晚の救急医の指示どおり、血液内科を受診した。若い医師であった。頸部、腋窩部、鼠径部のリンパ腺を触診し、採血のあと、抗生物質の点滴を看護師に指示していた。炎症の程度を示すCRP(C-reactive protein)が6.4(mg/dl)(正常値は0.5以下)であること、白血球が22,000(正常値は4,000~9,000/mm³)であることから、ばい菌が体内に入ったとの診断であった。飲み薬の抗生物質クラビット錠(100mg/錠)を1週間分処方され、様子見ということで帰宅することとなった。このとき、右下肢下部前面が上下に10センチくらいの範囲で斑点状に赤くなってはいたが、歩けない状況ではなかった。医師も、何だろうと言う程度であまり関心を示していなかったように思う。この斑点状の赤みが後の蜂窩織炎の元凶であるとはその時には分からなかった。体温は37~38℃を示していた。

8月19日(火)、右下肢下部前面から周辺にわたり赤く腫れ、ズキン、ズキンと痛みが激しく全く歩けなくなってしまった。昨晚投与された飲み薬の抗生物質を1錠ずつ食後にのみ、終日、氷で患部を冷やしていたが一向に治る気配がみえず、地獄の1日であった。用を足すにも、這っていくしか方法はなかった。特に、右足を床につけるようにして立つと、ズキ〜〜〜ン！と痛みが走るため、左足で立ち、右足は後方に曲げて宙に浮かせ、痛みを和らげるようにしていた。

体温も 38°C を超えた状態が続き、食欲もなくなっていた。

8月20日(水)、家内がインターネットにより名古屋市内で松葉杖が借りられるところを探してくれた。某・慈善団体が無料で貸してくれるとのことであった。そこで、例の救急病院へ電話し、とても我慢できる状況でないことを伝え、再度、血液内科を受診した。医師は、患部を診るなり自分の専門領域ではないと判断したのか、皮膚科に電話して転科を勧めた。皮膚科外来で、医師は、私の右下肢を診てこれは「蜂窩織炎」だ！抗生物質の点滴をして安静が必要だ！と言い、即入院を勧め、すぐ病室に電話して空き病室を確認してくれた。飲み薬の抗生物質くらいではダメであり、且つ抗生物質も効くものと効かないものがあるので、やってみないとどれが効果的なのかは分からないとのことであった。はじめに投与された抗生物質の点滴用のビニールバッグには「ペントシリン：100ml」と書かれていた。しばらく、この抗生物質が投与されるらしい。この日は、外来のベッドの上で1本、病室で夜8時ころ1本の計200mlの点滴を受けた。また、皮膚科医師はポカポカ発熱している患部をさわり、「これは長くかかもしれないぞ」とか、「ばい菌は足の指間にある水虫からではなく、右下肢の皮膚から直接入ったものだ」と診断し、水虫からの感染説を否定した。さすがに専門家の見立ては違うナと感心したものである。それは後日、右下肢がパンパンに腫れたとき右下肢前面のうすい皮膚表面に、縦に細い切れ目が現れ左右に割れはじめたことから、草刈りをしたとき知らず知らずのうちに切り傷ができ、ここからばい菌が入ったのではないかと自分で想像し、皮膚科医師の前記見立てを改めて感心したものである。この日の血液検査の結果、CRPは9.6を示していた。ばい菌はブドウ球菌とかレンサ球菌などが多いらしいが、患部の化膿で右足切断なんてことにならないようにと祈ったところである。

病室の消灯は22:00のため、家に居るときと異なり朝は6時前に目が覚めてしまう。毎日、2本の点滴の投与だけが仕事のため、新聞は隅から隅まで読んでもまだ時間が余る毎日であった。全治2週間ということであったので、9月上旬に私に課せられていた種々のDutyは全てキャンセルすることにした。関係者には大変なご迷惑をおかけすることになってしまった。

8月22日(金)、朝8時前に血液検査用の採血をし、ついでに抗生物質の点滴があった。午後にはCRPなどの結果が知りたいための早朝の採血であり、何度も患者に針をさすことを避けるため、ついでに点滴をするという配慮であ

と思った。体温 36.7℃、血圧 120/60 であり、ほぼ正常に戻っていた。夕方 16:00 頃、主治医の回診があり、CRP が 2.6 に下がっていること、白血球も 5,400 と正常に戻っていることが告げられた。従って、抗生物質は同じペントシリン：(100ml) を継続投与されることとなった。

8月27日(水)に、ようやく退院の許可が出た。CRPも0.64に下がっていた。点滴は全部で14本投与されたことになる。入院中の移動はすべて車椅子を使用したため、何となく膝関節がガクガクとなり、脚力が衰えていると感じた。患部は多少の違和感があったが、痛くて歩けないということにはなかった。入浴も入院中禁止されていたので、早く家に帰って一風呂浴びたい気持ちであった。退院してもあまり長距離を歩いたりしないで安静にするようにと注意を受け、飲み薬の抗生物質サワシリン錠：(250 mg/錠)を1週間分処方され退院した。そして、退院1週間後の9月3日(水)の皮膚科外来診察では、まだ皮膚表面が赤く、テカテカしていたため、皮膚科医は「まだダメだな〜」と言いながら、抗生物質をフロモックス錠：(100 mg/錠)に変えみようと言って処方した。ばい菌は簡単には退治できないらしい。

インターネットで「蜂窩織炎」を検索してみると、2001年4月に田中康夫長野県知事もこの蜂窩織炎に罹患し入院していたことが紹介されていた。やはり、急に右下肢の疼痛が激しくなり即入院となったと記されている。最も重い時、CRPは3.7、白血球が9,000だったそうである。これらのデータを比較すると、私の場合の方が遙かに高い値を示しており、自慢すべき事ではないが、田中知事より重症であったことが分かる。蜂窩織炎は力士がよく罹る病気と聞く。下肢のふくらはぎを腫らし、テーピングして相撲をとっている様子をしばしばTVで見かけたことがある。痛みを我慢してよく相撲がとれるものと驚いている。それは蜂窩織炎の痛みがどんなものであるかを自分が体験したからである。蜂窩織炎は一種の皮膚病であるので軽い病気と思われがちであるが、ばい菌が毛細血管から肺や脳、心臓に入ると命にも関わる病気らしく、怖い病気のようなものである。幸い現在のところ自己診断では軽快する方向にあると見られるので、来る9月10日の皮膚科外来診察に期待をかけているところである。

ちょっとした不注意でとんだ目にあってしまった。私の「病気の問屋」の在庫をこれ以上増やさないように今後注意しなければならない。

(平成15年9月6日記)

(名古屋大学名誉教授)